

健康文化

四才の子供

今井田 二三子

子供達の姿が見えないのに家族が気付いたのは、燃えるような真夏の太陽が、かなり西に廻ってからでした。何時もなら庭先を走り廻ったり、田圃の畦道で蛙や蝶を追いかけている子供達の嬉々とした話し声も、泣き声もその日の午後には私も耳にしなかったように思いました。

その家族は第二次大戦も終わりに近づいた頃、名古屋で空襲を受けられ、祖父の遠縁であるところから私の処に疎開をされていた方々で、私達は助けられたり、助けたりで半ば家族と同じように暮らしておりましたので、私にとってもこれは大変な出来事でした。

姿が見えなくなったのは下の四才と二才の女の子と遊びに来ていた近所の同じ四才の男の子でした。

勤めに出ていた父親も呼び戻され、小学生の兄達、親戚それに近所の人々も次第に加わり、家の百米ほど西を流れている用水路、近くの神社の森、親戚、知人の家へそれぞれ手分けをして探しに、また尋ねに走りました。

今のように電話も車も普及していなかったので唯一の機動力は自転車だけでした。私も竹竿を持って出かけたように記憶しています。もしかして用水路に転落したのではないだろうかという思いが無意識に近くにあった竹竿を握っていたのではなかったかと今になって思います。その頃は食糧の乏しい時代で、食糧を盗まれることはあっても、食事をさせなければならない子供を連れてゆくような人はありませんでした。それでも、もしかして人攫りに連れてゆかれたのではないだろうか、などと思いながら探し廻った結果、わかったことは午後二時頃三人は二軒ほど離れた隣村の伯母さんの家を訪れ、お小遣いを貰って暫くして帰ったということだけでした。子供達の服装は下着のシャツと男の子はパンツ、女の子はスカート、そのうちの一人は裸足の様子でした。隣村の伯母さんの家から帰る途中電車の駅がありますが、改札もあり、当時といっても少々異様な姿の子供三人に気付かれたら連絡して下さる筈だと言いながらも勿論その駅にも尋ねに誰かが行きました。二才の子供の歩ける範囲を頭に描きますと、探す範囲がどうしても家の近くと言うことになってしまいました。

しかし子供達は何処へ消えてしまったのか夏の日が西の山の端に沈む頃になってもわかりませんでした。探す人々の顔にも次第に焦躁の色が浮かび始め、「警察に届けよう」「もう暗くなってくるから、探すのは困難になってくる」「用水路に落ちていたらどうするのだ、もう少し下流の方まで探しに行こう」、また皆が探しに散り始めたその時でした、遠くから「いたぞーっ」という叫び声が聞こえてきました。その声を耳にしたとたん私は安心と疲れでヘタヘタと縁先に腰を下ろしてしまったように覚えています。

子供達は親の顔を見るなりワンワンと泣きだし、泣きやんだ頃それぞれの親の腕に抱かれ、また手をひかれて家に帰りつきました。

子供達の発見されたのは私の家から五百米ほど離れた電車の停留所の近くだったそうです。

後から、その四才の女の子が両親に語った話を総合しますと、伯母さんの家から帰る途中、電車の駅（その駅は家の近くの駅の隣にあります）にさしかかったとき、どちらからともなく電車で帰ろうということになり、駅の人に見とがめられることもなく改札を通り抜け無事車中の子供になったようですが、次の駅で下車しようとして、まごまごしているうちに発車してしまい、次の駅でも下車できず更に四軒ほど離れた町の駅まで行ってしまったようです。ここは乗降の人々も多く子供達はつられて下車してしまったところ、もう一度上りの電車に乗って引き返さなければならないことに気付き、改札口を通過しようとして今度は駅の人に見とがめられ「子供はここに来てはいけない」と言って追い出されてしまったそうです。

私が四才の子供に対する認識を改めたのはこれからの話です。

改札口を通してもらえなくなった子供達は「じゃ一歩いて帰ろう」ということになったようです。「家は電車の停留所の近くだから線路に沿って歩いていけば家の近くの駅に着くことができる。そこから家までの道は知っているから」四才の子供は両親にそう話したそうです。二人は二才の子供の手をひき、疲れて歩けなくなったときは代わるがわる背負い、途中で眠ってしまったときは草の上で眠らせ、畑をぬけ、田を横切り、手足に傷を作りながら必死に歩き続けS停留所近くにかかったとき探し続けている両親に無事出会えたということのようです。

四才の子供のこの記憶力、判断力、そして行動力を聞かされたとき私は本当に目の鱗がはがれたような思いがしました。それまで私はこの子供達を子供という眼でしか見ていなかったことに気付きました。これからはこの子供達に必ず責任を持てる言葉で話しかけねばならないと心密かに決心をしました。いつ

か四才のとき聞いた私の言葉を思い出してくれるとき、あれは、あの人の本当の言葉だったと感じてもらえるような。

そうした思いである日外来を訪れた人気のある漫画のプリントされたズボンをはいた男の子に、漫画の主人公の名前を尋ねたところ、二回ほど早口で教えてくれた後、私の顔をじーっと見上げて疑わしように「わかるかーっ」「忘れるだろうなー」と言い残して帰りました。結果は正しくその通りで、その男の子もまた四才でした。

(内科開業医)